令和６年３月３日（日）

法隆寺周辺遺跡（23－１次）【若草伽藍跡推定地】発掘調査　現地説明会資料

斑鳩町・斑鳩町教育委員会

調 査 地　奈良県生駒郡斑鳩町法隆寺１丁目９８９
調査原因　民間の建物建築に伴う調査
調査期間　令和５年５月８日～継続中
調査面積　456 ㎡

１．はじめに

昭和 14（1939）年および昭和 40～50 年代に実施された発掘調査成果などから、創建法隆寺である「若草伽藍」は「四天王寺式伽藍配置」と想定されていて、今回の調査地が塔の南側の伽藍の中軸線上に位置するため、中門および南門などの建物が想定される若草伽藍の南方地域にあたっています。また、明治時代初め頃の古図によると、今回の調査地は空閑地として宅地化されずに「亥嶋社」が祀られており、法隆寺や周辺住民によって聖徳太子ゆかりの土地として保存顕彰されてきたことがうかがえる土地でもありました。

２．調査成果の概要

（１）検出遺構

見つかった遺構の大半は、近現代を中心とした土坑や溝などです。また、当初推定されていた若草伽藍の時期の遺構として、中門や南門に関わるような遺構は確認できませんでしたが、調査区の中央部付近で瓦を多く含んだ溝があります。

溝の規模は、幅が約２ｍ、深さは約 50 ㎝（※上部は近代頃までに削平を受けており、本来はもう少し深かったと思われます）を測る東西方向の溝で、約 16m 分を確認しました。ただし、溝は正しく東西方向には向いておらず、東に向かい北に傾いています。この傾きは、北に対して約 20 度西に振れた若草伽藍の中軸線に対して、ほぼ垂直関係にあります。

溝の埋土は大きく３層に分けることができます。上層は上面が削られていることもあり、場所によってはあまり残っていませんでしたが、比較的きれいな土の層です。中層は土よりも瓦の方が多く、大量の瓦が含まれていました。また、瓦に混じって焼けた壁土片も見つかりました。下層については、一部で断割り調査を実施したのみで、詳細については明らかではありませんが、瓦などの遺物はわずかしか含まれていないようです。

（２）出土遺物

瓦をはじめ、須恵器や土師器、瓦器、瓦質土器、陶磁器、貨銭などが遺物箱で約 300 箱分出土し、このうちの約 200 箱が溝から出土しました。溝からの出土遺物の多くは瓦で、軒丸瓦や軒平瓦や鴟尾（しび）が含まれていますが、その多くは丸瓦や平瓦です。これらの遺物の様相については、全ての遺物の洗浄作業が終了していないので、詳細は明らかではありませんが、おおむね７世紀前半の時期のものと考えられます。

以下に、溝から出土した主なものを紹介します。

Ａ．軒丸瓦

①素弁九弁蓮華文軒丸瓦（３Ｂｂ）

若草伽藍金堂所用の創建時の軒丸瓦です。日本で最初の本格的な伽藍を備えた飛鳥寺（明日香村）出土瓦と同笵（※同じ型を用いてつくった瓦）ですが、笵型（木製の型）が若草伽藍に用いる軒丸瓦を製作する際に、「中房」（中心部分）の「蓮子」を２つ彫り加えて１つ＋６つとしています。600～610 年代頃と考えられ、手彫り忍冬唐草文軒平瓦と組み合います。

②素弁八弁蓮華文軒丸瓦（６Ｄほか）

若草伽藍塔所用の軒丸瓦です。花弁が大きく盛り上がり、「中房」が大きく丸くなるのが特徴です。620～640 年代頃と考えられ、型紙を使わない手彫り忍冬唐草文軒平瓦と組み合います。

③素弁八弁蓮華文軒丸瓦（７Ａほか）

若草伽藍北方建物所用と考えられている軒丸瓦です。630～640 年代頃と考えられ、型押し忍冬唐草文軒平瓦（213）と組み合います。

④単弁忍冬文装飾六弁軒丸瓦（33Ａ）

若草伽藍所用の軒丸瓦です。６つの蓮華文に５葉の忍冬文を飾り、弁端に珠文を置く特殊な文様です。聖徳太子建立の尼寺である中宮寺跡からも出土しています。630～640 年代頃と考えられ、軒丸瓦の瓦笵を軒平瓦の瓦当に押した型押し忍冬唐草文軒平瓦と組み合います。これまでに見つかっているなかで最も保存状態がよいものです。

Ｂ．軒平瓦

①手彫り忍冬唐草文軒平瓦

我が国で初めて軒平瓦が製作され葺かれた寺院が若草伽藍（創建法隆寺）です。最も古いものは文様を表現した型紙を瓦当面にピンで止めて文様の要らない部分を彫って削り取って文様を表現しています。今回出土したものは型紙を用いないもので、忍冬唐草文の文様（彫る部分を示した線）を顔料で描いた珍しい資料が出土しています。600～620 年代頃と考えられ、素弁九弁蓮華文軒丸瓦（３Ｂｂ）や素弁八弁蓮華文軒丸瓦（４Ａ）（※今回の調査では確認できていないので展示していません）と組み合います。

②型押し忍冬唐草文軒平瓦（213 ほか）

５葉の忍冬文を彫り込んだ型（スタンプ）を上下交互に連続して瓦当面に押すことにより忍冬唐草文を表現しています。630～640 年代頃と考えられ、素弁八弁蓮華文軒丸瓦（７Ａ）や単弁忍冬文装飾六弁軒丸瓦（33Ａ）などと組み合います。今回の調査では、ほぼ完形品に近いものが出土しました。

Ｃ．鴟尾

建物の大棟の両端に取り付ける瓦製品で、若草伽藍跡からは数種類の鴟尾が出土しています。金堂などで用いられたと考えられていて、「段」によって表現されているヒレ部分のうち、比較的大きな破片が出土しました。

D．不明瓦製品

Ｂ－②の型押し忍冬唐草文軒平瓦で使用されたスタンプ文を瓦質の板状の表面に上下を交互に押圧している瓦製品です。全国的にみても類例がありません。形状などから鴟尾や鬼板の可能性があります。また、スタンプの笵型の文様全体を知ることができる貴重なものです。

E．鬼板

蓮華文を方眼とコンパスで割り付けた粘土板の表面に単弁八弁蓮華文を連続して手彫りをして文様を表現したものです。これまで見つかっている同形式のものに裏面にくりこみの把手があることから鬼瓦であったことがわかっています。塔の隅棟（すみむね）の先端に用いられたと推定されています。国内では類例のない珍しいものですが、百済の扶余（ぷよ）に石製の類例品があります。

F．焼けた壁土片

焼けて固まった壁土の破片で、壁面や木舞（こまい）部や藁スサが確認できます。

G．凝灰岩切石片

二上山産の凝灰岩で、加工面が確認できることから、基壇や須弥壇（しゅみだん）などを構成していた石材の可能性があります。

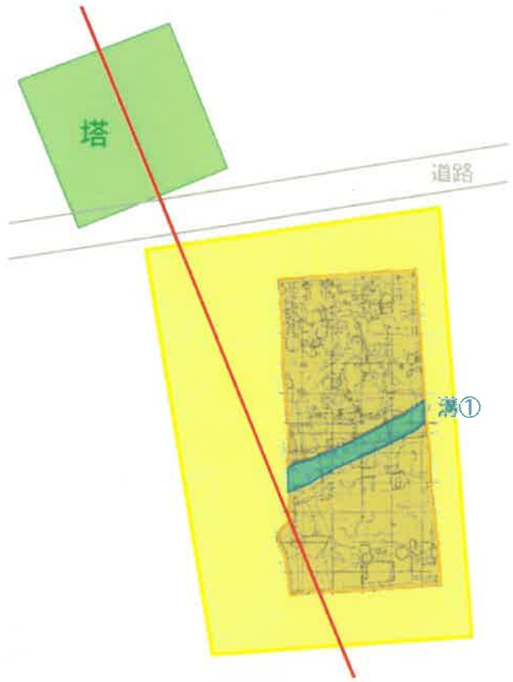
３．まとめ

今回見つかった溝は、若草伽藍の中軸線に対してほぼ垂直関係にあることから、若草伽藍の南方を区画していた何らかの溝の可能性があります。また、出土した瓦の年代が若草伽藍の存続時期である７世紀前半代と考えられることや、瓦に混じって焼けた壁土片などが含まれていることなどから、これらの瓦は、『日本書紀』の天智天皇九（670）年条の法隆寺罹災（焼失）記事から、法隆寺罹災後の片づけに伴って溝に投棄されたものと考えられ、この瓦の出土した土層は溝の中層に相当します。この中層に対して瓦片をわずかに含む下層は、溝が機能していた時期の堆積層と考えられます。一方、溝の上層については、比較的きれいな土で瓦の上面を覆っている状況がみられることから、土を覆って瓦の投棄した状態をわからないようにしたのかもしれません。

若草伽藍は、昭和14（1939）年と昭和43・44（1968・1969）年の調査において主要伽藍である塔や金堂の状況が明らかとなりました。またその後、昭和50年代から始められた法隆寺防災施設工事に伴う発掘調査により、主要伽藍を囲っていた柵列と考えられる柱穴が北側と西側で見つかりました。また、東側については、現在も残っている若草伽藍の方位の振れに近い水路が、飛鳥時代の地割りが踏襲されていると考えられ、東限ラインと想定されています。このことは、平成19(2007)年度にこの水路の西側の東面大垣の解体修理工事に伴い発掘調査が行われた結果、大垣の下から柱穴が見つかっています。南側については、塔と金堂の中心を繋いだ距離（26.4m＝75尺）を参考にして寺域が想定され、南北約170m、東西約150mの寺域が想定されています。そこで、今回の調査で見つかった溝を寺域の南限溝と仮定すると、南北間の距離は14m短い約156mとなります。ただし、わずかな範囲での発掘調査結果などから導かれた寺域であることや、塔と金堂以外の主要な建物が明らかではないことなどから、若草伽藍はまだまだ多くの謎につつまれた寺院といえます。

今回の溝の発見は、謎の多い若草伽藍の寺域を考える上で、重要な資料を加えたものといえます。また、溝から出土した瓦については、質と量ともに大変充実したものであり、法隆寺の瓦だけでなく我が国の古代瓦の研究において貴重な資料を提供することとなりました。今回の発掘調査成果によって、遺構・遺物の両面から若草伽藍の研究が進展することが期待されます。

法隆寺若草伽藍および西院伽藍と調査地との関係　位置図



遺構概略図

溝内遺物出土状況（西から）

瓦出土状況（北東から）

軒平瓦出土状況